

町史

とっておきの話

256

新潟大学教授

崎尾 均

只見町の水辺林は未来への遺産

—只見町の河畔林と溪畔林—

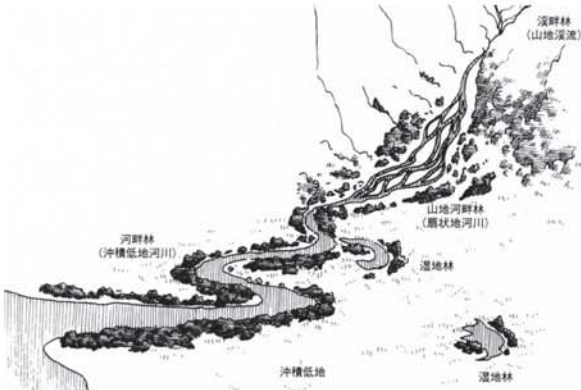
日本の森林

▼今月号から崎尾均新潟大学教授が只見町の水辺林について六回にわたって執筆します。

▼崎尾先生は森林生態学が専門で、水辺林の保全と修復、外来種ニセアカシアの生態研究の権威です。

▼さらに、只見ユネスコエコパーク支援委員長としても活躍されています。

▼そこで水の郷・只見町の水辺環境の価値についてじっくり解説していただきます。



▲水辺林の種類と河川流域 (崎尾2002)

日本は国土の六七%が森林に覆われているため、森の国とも言われます。そのため水資源も豊富です。世界の国々では、森林の分布が水環境によって大きく規定されているところがたくさんあります。一方、日本では北から南まで年間の降水量が多いため、森林の分布は温度によって決まっています。只見町でもっともよく知られている木はブナで、町の木にもなっています。第6次只見町振興計画にも「ブナと生きる町、雪と暮らす町」としてブナによるまちづくりが進められています。

水辺林とは？

只見町に分布している森林は、ブナ林やスギの人工林だけではありません。森林の分布は地形によっても大きな影響を受けています。只見町の森林を眺めてみると、乾燥した尾根にはキタゴヨウやツツジ類、山腹にはブナやミズナラが分布しています。また、沢沿いや

河川周辺には、トチノキ・サワグルミ・ヤナギ類が分布しています。このような沢・河川・湿地周辺に分布している林を「水辺林」と呼んでいます。

とくに河川上流域の沢沿いの谷地形に分布する水辺林を「溪畔林」、山地から流れ出た扇状地周辺の水辺林を「山地河畔林」、中流域から下流域の河川沿いの水辺林を「河畔林」、さらに湖周辺や河川の後背湿地に分布する森林を「湿地林」と言います。このようなことから、水辺林は森林(陸域)と河川(水域)をつなぐ境界に分布する森林と定義することもできます。

ヤナギ類からなる山地河畔林

只見町内には、只見川とその代表的な支流である伊南川や叶津川が流れています。これらの大きな河川沿いに形成されている水辺林が山地河畔林と呼ばれるものです。この水辺林の主要な構成樹種はヤナギ類です。もっとも有名なものは、絶滅危惧種に指定されているユビソヤナギですが、そのほかにシロヤナギ・オオバヤナギ・オノエヤナギなどが分布していま

す。只見川と伊南川の合流地点や、伊南川の杉沢周辺の中州にはこれらのヤナギ類が多く見られます。以上あげたヤナギ類は高木ですが、低木のヤナギも見られます。ネコヤナギ・イヌコリヤナギ・タチヤナギなどです。春、3月下旬になると、まずユビソヤナギが花を咲かせます。それに遅れをとらじと、オノエヤナギが、4月下旬にはシロヤナギが開花します。

高木が多い溪畔林

只見町では、大小の川に山々から無数の支流が流れ込んでいます。これらの溪流周辺に分布する水辺林が溪畔林です。トチノキ・サワグルミ・カツラなどの樹高三〇メートルにもなる高木が鬱蒼と溪流を覆っています。只見沢から浅草岳の登山道を沢沿いに歩いて行くと、これらの溪畔林を見ることが出来ます。

只見町の溪畔林の特徴は、本来、山腹斜面に分布しているブナが沢沿いまで下りてきて、サワグルミやトチノキと混じっていることです。「恵みの森」のトレッキングコースは、まさにブナが水際まで

自生している溪畔林の中を歩きます。水際まで生える理由は、はっきりとしていませんが、積雪と関係がありそうです。只見町では、溪流の谷底での積雪深は一〇メートルにも及びます。会津朝日岳の登山道沿いにあるトチノキも十数メートルの幹が蛇のように地表を這っているのが観察できます。これも冬季の積雪の圧力によって倒伏したものです。このように只見の森林植生は、雪が大きく作用していると言えます。



▲「恵みの森」の溪畔林